

フィラリア症がどんな病気かは皆様よくご存知のことと思いますが、意外に誤解の多いのが予防についてです。フィラリアシーズンを前に予防についてお話ししたく増刊号を発行いたしました。

平成24年3月24日



フィラリア予防



フィラリア予防薬はイヌの体内に入ればしばらく時間の経過したフィラリアの幼虫をまとめて駆除します。フィラリア症を予防する薬であって、蚊に刺されないようにしたり、フィラリア（犬糸状虫）を体内に入れないようにしたりするものではありません。ですから蚊に刺される前に投薬をしても意味がありませんし、蚊がいなくなったからといって投薬を止めてしまうのは危険です。

（*ノミ・ダニ予防薬は刺される前に投薬しその後の持続した効果を期待するものです）

イヌに影響を及ぼすフィラリア生活環

- ・ 一定温度以上になると蚊の体内で、フィラリアの幼虫が犬への感染可能な感染幼虫となる。
- ・ 感染幼虫は蚊の吸血時にイヌの体内に侵入する。
- ・ イヌ体内の感染幼虫は3～10日で体内移行幼虫となる。
- ・ 体内移行幼虫は約70日で未成熟虫となる。 ← 予防薬

投薬しないと・・・

- ・ 未成熟虫は血液内にはいり約50日で心臓に達した後、肺動脈に移行し子虫を産む。 → フィラリア症

フィラリア予防薬は・・・

- 蚊に初めて刺された1ヶ月後に投薬を開始し、最後に刺された1ヶ月後に投薬を終了するのが適切です。
当院ではHUDという計算式にもとづいたデータに前後2週間の幅をもたせ、感染幼虫を持った蚊の活動期間を、4月20日から11月20日と想定します。
したがって、**予防薬は、[5月20日から・毎月1回服用し・12月20日で終了]**となります。
- 投薬を開始する前に、毎年必ず血液検査が必要です。
フィラリア症に罹患した状態で予防薬を服用すると、重篤な副作用を起こし死に至ることもあります。
薬品の使用上の注意としても投与前のマイクロフィラリアの検査実施が明記されています。
*毎月きちんと投薬しても、ワンちゃんがこっそり吐き出したり、吸収されず未消化で排泄されたりといった危険性があります・・
- 現在認可されている予防薬には3つのタイプがあります
内服タイプ — 月に1回服用します。
注射タイプ — 半年に1回皮下注射します。
滴下タイプ — 月に1回皮膚につけます。
注射タイプは副作用（重篤な場合は死亡）の報告例があるため当院ではお勧めしておりません。滴下タイプはノミ予防も同時にできるというメリットがありますが、ダニには効果がないことを考えるとこちらもお勧めできません。以上のような理由により、当院といたしましては内服タイプをお使いいただきたいと思っております。ただし、内服薬が適さないワンちゃんをご相談下さい。

フィラリア予防に関するミニ知識、お役に立ちましたでしょうか？

近年、横浜ではフィラリア症の罹患率はかなり低くなってきています。これは、皆様がフィラリア予防をしていることにより、感染幼虫をもった蚊が減ったことが大きな要因であると思います（いくら蚊に刺されても蚊が感染幼虫を持っていなければフィラリアが体内にはいることはないわけです）。フィラリア予防はご自分の子のみならず周りのワンちゃん達のためにもなっているのです。感染してしまうと、フィラリアを駆除することはできても、心臓や肺に受けたダメージを完全に元の状態に戻すことはできません。罹患率が下がっても油断することなく予防をしていくことが大切と考えております。



まるつか動物病院